

書 評

Robert Colls, *This Sporting Life: Sport & Liberty in England, 1760-1960*
(Oxford: Oxford University Press, 2020)



松井 良明

一口に「フットボール」と行っても、その言葉が意味するものは時代と場所によって大きく異なる。同じ「グリーン」であっても、サッカー場かゴルフ場かはよく見ないと判断できない場合もある。考察の対象をどのように絞り込み、またどこを広げるのか。事象の違いを受け止めながらも、共通点に注目しようとしたのが本書のユニークなところである。

著者のロバート・コールズは、デモントフォート大学の国際スポーツ史・文化センターで文化史の教授を務めている。生まれ故郷のサウス・シールズで、使われなくなった炭鉱用トロッコの旧道でフットボールと出会い、レスターの日曜リーグでプレイした経歴を持つ。そのため、本書では実践者の「衝動」や「感性」への目配りも感じとることができる。

本書が扱っているのは、イングランドでかつて見られた様々な「スポーティング・ライフ」である。歴史上の多くのイングランド人が実名で登場し、彼ら彼女らの「体験」を経た「出来事」が語られる。その背景に共通するのが、イングランド人の「特権」と信じられている「リバティーLiberty」だというのが著者の一貫した主張であり、本書の狙いである。

本書を読み進める中で、わたしはまるでどこかのテーマパークを訪問しているかのような感覚に陥った。そこには8つのテーマ館があり、それぞれのテーマに即した「出来事」、「人物」、「事物」等が紹介される。個々の「スポーティング・ライフ」はそれぞれ個性的で興味深いため、あたかもタイムスリップしたかのように感じる人もいるかもしれない。

そのために著者は、新聞、校友誌、自伝、手紙などの文書はもちろんのこと、絵画、小説、写真、映画、広告やちらし等にも言及する。書誌情報

の充実ぶりには誰しも圧倒されよう。

以下、本書の構成とその概要を見て行きたい。

まず序章では、本書で用いられている方法、構成、狙い等が記されている。とくに方法についてだが、巻末の書誌情報からもわかるように、基本的には一次資料に依拠するオーソドックスな手法がとられている。「そこにはゲームの結果も打率も書かれてはいないが、200年以上にわたる様々な『競技スポーツ』と『スポーツ(楽しみや遊戯)』に関わる人々の『スポーティング・ライフ』を現す民族誌がある」(p.2) からである。

本書は、たがいに「緩やかに関連しあった」8つの章(事例研究)から成っている。

第1章「自由の地」(Land of Liberty)

ここでは、狐狩り、乗馬、競馬等の「フィールド・スポーツ」が取り上げられている。中流階級と労働者階級の人々が仕事以外で馬に近づくのは難しいことだったが、貴族やジェントリにとっての乗馬は、彼らの自己イメージと地域ネットワーク等の維持においてきわめて重要な素養であった。「狩猟」を通して彼らは「自由」を体感し、19世紀以降は上流階級における女性開放に結びついていく。

第2章「ボニー・ムーア・ヘン」(Bonny Moor Hen)

第2章は、貧しい人々の「狩猟」が取り上げられる。もっとも、彼らの狩猟行為は狩猟法によって「密猟 poaching」と見なされていた。これに対抗するため、地主たちは「獲物番(ゲームキーパー)」を武装させ、ときには治安判事や騎兵も動員して「密猟者」に対峙したが、それは両者それぞれの「自由の地」をめぐる戦いでもあった。18世紀に流行する馬や猟犬を描いた絵画には地主が所有する広大な緑地が背景に描かれている。スポーツ絵画は彼らの権威を表象するものでもあったのだ。

第3章「『底力』」('Bottom')

本章は、1860年にハンプシャの平原で行われたセイヤースとヒーナンのプライズ・ファイトの試合に始まる。プライズ・ファイトは素手で行う荒々しい闘いで、今日の競技ボクシングの先行形態の一つである。最も隆盛したのは19世紀前半のロンドンでは、「ファンシー」と呼ばれる取り巻きが拳闘界を支配していた。同時に興ったグラブを付けたスパーリングを基に

競技ボクシングが誕生するが、「底力」の精神は「気力 heart」に引き継がれていく。

第4章「慣習」(Custom)

ここでは教区の貧しい人々の視点から「慣習」について検討している。中心となるのは、スタムフォードで毎年行われていた「牛追い」である。1833～40年にかけて、動物虐待防止協会は首都のリベラル派とともに内務省や王室にも働きかけてこれを禁止しようとしたが、民衆にとり、「牛追い」は古くからの「慣習」であり、「国制」に基づく「特権」であり、彼らの「自由」の表現でもあった。

第5章「地元」(Home)

教区民にとり、「スポーツ」や「祝祭」などの地元の「慣習」は、彼らの帰属意識を育む「儀式」ともいえるものだった。エドウィン・バターワースが1835年に行った調査には、工業化が進むランカシアでかつての教区行事が失われたり、変容したりした記録が残されている。古い救貧法は教区の「セツルメント」に結びついていてのもの、その役割は1830～80年代にかけて国家的な福祉制度にとって代わられていく。

第6章「新しい道徳的世界 (New Moral Worlds)」

第6章は、19世紀以降の近代的な競技スポーツとエリート校の状況が振り返られる。最初の主人公は、パブリックスクールのアッピンガム校で校長となったエドワード・スリングである。この時代の校長たちはこぞってパブリックスクールを「新しい道徳的世界」へと作り変えようと尽力したが、在任中の彼らは、学生との闘争の日々を過ごしていた。本章では、中流階級の女性にふさわしい教育を模索する女性校長にも目が向けられている。20世紀初めには、「新しい学校」のシンボルとして「運動場」が不可欠な施設となり、「新しいエリート文化」が再生産されていくのである。

第7章「ブラッド」(Bloods)

「ブラッド」は貴族の若者を意味する古い言葉だが、パブリックスクールではファッションとスポーツに長けたチーム・キャプテンなどの特別な待遇を受ける学生を意味するようになった。この言葉は男子学生のみにも用いられたが、スポーツが得意な女子学生もいたし、多くの女子学生にとってもファッションは重要だった。たとえば、クリケットを通して「完全な自由」

を感じる学生もいたが、それはかつての「無秩序な」自由ではなく、「文化的」ないしは「道徳的」な自由であり、競技スポーツは「新しい道徳的世界」を体現するものとして男子学生のみならず女子学生の間にも広がっていくのである。

第8章「近代人」(Moderns)

第8章では、近代人がプレイするゲームの一つとしてアソシエーション式フットボール(サッカー)がとり上げられている。パブリックスクールの運動場を離れ、工業化したイングランドの裏通りで行われていたフットボールが本章の始まりである。1853年の工場法によって得られた土曜半日の休暇を端緒として、多くの労働者階級の少年にとって、フットボールが生まれて最初に夢中になれるスポーツとなっていく。20世紀後半になると、フットボールは映画、ダンス、ポピュラー音楽とともに、労働者に「新しい自由と帰属意識」を生み出したが、イングランドのフットボール(サッカー)が低迷した時期には別の「新しい暴力」が出現したことも忘れてはならない。

結論は簡潔で、前向きな内容である。イングランド人の意識に「スポーツ」は生き続けている。なぜなら、「スポーティング・ライフ」は現在も、「自由」のみならず、「気力」、「慣習」、「帰属意識」などの要素と密接に関連し続けているからである。

本書を評する上で、もっとも大事なポイントは研究と叙述の手法についてであろう。著者は、歴史的事象について記述する際に特定の社会理論モデルを援用することの弊害を指摘している。彼によると、特定の社会理論については個別的事象を一般化することで個々の事象が匿名化されてしまう。これを避けるために著者が考えたのが、文化人類学のフィールドワーク等で用いられる「参与観察」の手法である。言うまでもなく文献を中心とする研究でこの手法をそのまま用いることは困難だが、著者が意図したのは、「主題の外にある一般的な理論を適用するのではなく」、「主義」を持たずに「中まで入ってそこからコミュニケーションをとる」ことだった。「私ではなく、彼らの人生について書き、見知らぬ人ではなく、隣人となり、全体を念頭に置き、すべてが重要であることを忘れなかった」(p.8)という。

この手法は結果的にたいへんユニークな考察を生むことにつながったが、それと同時に、既存の歴史叙述に慣れ親しんだ読者にとっては、いささか読みづらい一因になったようにも思われる。本書は「固有名詞を持った社会史」ないしは歴史的な「民族誌」ともよべる内容であり、すべてのエピソードがたいへん生き生きと描かれているのだが、同じテーマであるはずの一つの章の中で語られる事象の内容や時空がときに大きく変わることがあり、その都度、頭の切り替えが求められるからである。

さらにもう1点。著者は、結局のところ、呼び名は変わっても、「リバティー」という強力な「底流」はすべて同じであったと述べている。そのことから、本書の内容はいわば「リバティー遍在論」に陥っているというそしりを免れないかもしれない。きちんと読めば「リバティー」の内容も時代によって変化したことが読み取れるのだが、8つのテーマに分かれていることもあり、そのことがいささか理解しづらい構成ではある。イングランドにおいて「リバティー」と「スポーツ (スポーツ)」が強く結びついてきたことは十分に理解した上で、「リバティー」そのものの歴史的変化についてもわかりやすくまとめてほしかったというのが評者の感想である。

だがそれでもなお、本書が、イングランド人のスポーツ観とその変遷を語る上で避けては通れない貴重な成果であることを明記しておきたい。

一奈良工業高等専門学校教授